

欧米人も感動した吉田松陰の至誠（真心）

所 功

吉田松陰（寅二郎・矩方<sup>のりかた</sup>）は、天保元年（一八三〇）八月、長州萩の下士（三人高十二石五斗、実収半額以下）の杉家に生まれた。けれども、数代前から深い関係のある吉田家に入った叔父大助が病弱のため、数え六歳で吉田家を継いでいる。

この吉田家は、織田信長に殉じた松野平介の末裔で、山鹿素行の「武教」を伝える「山鹿流兵学師範」として長州藩に仕えた。それゆえ松陰は、幼い頃から実父杉百台之助や叔父玉木文之進のもとで「忠義」の学に励み、数え十一歳で藩主毛利敬親に素行の『武教全書』の一部を進講している。

全国を訪ね学んだ松陰の足跡

松陰は、兵学者として机上の空論に飽きたらず、全国の地勢を知る必要があると考えた。そこで、嘉永三年（一八五〇）九州に旅立ち、長崎の出島でオランダ船に乗り、平戸で山鹿流宗家の山鹿万介に入門し、熊本で山鹿流兵学者の宮部鼎蔵に出会った。ついで翌四年（22）、藩主に従って江戸へ赴き、昌平校教授の安積良斎<sup>やすかきりょうさい</sup>と山鹿流兵学者の山鹿素水に入門するが満足できず、西洋砲術学の佐久間象山に師事し蘭学にも挑み始める。

さらにロシアの南下に備えるため東北を視察する。同四年（一八五一）十二月に江戸を発ち、水戸で会沢正志斎らに会い、宮部鼎蔵と共に会津―新潟―佐渡を経て秋田―津軽―青森

―仙台―日光などを廻り、翌五年四月江戸へ帰るが、脱藩の罪で萩へ戻された。しかし、翌六年五月、再び江戸に出ることを許され、六月浦賀へ来航したペリーの黒船を実見して驚く。ついでロシア艦隊を追って九州の長崎へ向かい、途中京都で梁川星巖らに学び、翌七年（安政元年）三たび江戸へ出ている。

そして同年Ⅱ安政元年（一八五四）の三月、松陰（25）は再来したペリーの軍艦に乗り込んだが、渡航の嘆願を拒否され、自首して投獄されるに至った。そのため、五年半後（30）江戸で処刑されるまで自由を失ったが、松陰の各地を歴訪した総距離は一万三千里（約五二〇〇km）以上にのぼるといふ。

このように松陰は、二十代前半に全国を東奔西走したが、二十五歳で海外渡航の夢敗れ、僅か三十歳で刑場の露と消えた。従って、その書簡などを集めて日本人により本格的な伝記が書かれるは、明治二十年代中ごろからである（徳宮蘇峰『吉田松陰』民友社、現在岩波文庫など）。

米國提督ペリーの日本遠征記

しかし、それよりも早く、松陰に関する記録・伝記は、欧米人が世に出している。その最初は、ペリーの日本遠征記録であり、それに二種類ある。

そのひとつは、ミシシッピ号艦長秘書のスパルディングが、帰国翌年の一八八五（安政二）年に出版した『日本遠征記』である（岩波書店と大和書房の『吉田松陰全集』に抄録）。

これによれば、彼は、松陰が乗船する前日の旧曆三月二十六日（新曆四月二十四日）下田の海岸を散策中「チョッキの胸部に差し入れられた手紙」（いわゆる投夷書）を見て「清楚で輪郭

の鋭いその文字は、知性と高雅な趣味をそなえた人によって書かれたものだ」と確信したという。

もうひとつは、米国政府の公式記録として、ペリーのものとで集めた資料を文筆家のホークスが纏めて翌一八五六（安政三年）年出版された『ペリー提督日本遠征記』である（同上全集に抄録。全訳本は岩波文庫・角川ソフィア文庫にも所収）。

この中でも、「二人の日本人」（松陰と金子重輔）は「優雅に標準的な漢文を書き、動作は礼儀正しく非常に洗練されていた」こと、また「この（乗船）事件は、激しい国法を犯し：生命まで賭そうとした二人の教養ある日本人の激しい知識欲を示すもの」であり、これによって「日本人は確かに探求好きな国民で、道徳的・知的能力を増力させる機会を進んで迎えた」と、やや上から目線の評価をしている。

ちなみに、松陰の「投夷書」原文（振仮名付）と通訳ウィリアムズによる英訳文は、後にウィリアムズが勤めたエール大学に収蔵されていることを、平成十五年（二〇〇三）に関西大学の陶徳民教授が発見し公表しておられる。

#### 英国作家ステイブンソンの伝聞記

ついで短篇ながら、松陰の伝記を初めて著わしたのは、『宝島』などの名作で知られる英国のステイブンソン（一八五〇～九四）である。その『YOSHIDA-TORAJIRO』は、英国にいた正木退蔵（一八四八～九六）から松陰の話を一気に書かれ、それが一八八〇（明治十三）年雑誌に発表されている（前掲の両全集所収。よしだみどり氏『知られざる吉田松陰伝』平成二十一年、祥伝社新書参照）。

正木退蔵は、長州藩士の家に生まれ、安政五年（一八五八）十三歳で松陰（29）に師事し、一年足らずで師を江戸へ送ったが、五年後（元治元年）藩世子の小姓役となる。やがて明治四年（一八七一）二十四歳で英国に留学、五年後再び英国に渡り、帰国後、東京職工学校長やハワイ総領事などを務めている。

この正木がステイブンソンに出会ったのは、明治十一年（一八七八、一説に翌年）だから、松陰に学んで二十年近く経つが、「正木氏は、彼の心の榮譽にふさわしい感動をこめて、私（29か30）に語った」という。その要点を抄出しておこう。

① 吉田は、漢学：兵学：非常に通曉し：少年時代から詩作も巧みであった。

② 彼は、他国の悪いところを除いて長所を取り入れ、夷人の知識によって日本を利するところがあるようにし：自国の学術や美德が、他国から犯されないようにと念願したのであろう。

③ 彼の予言者の魅力や男子のもつ燦然たる説得力が、多くの誠実な信奉者を得ていた。

④ 吉田は：痘瘡の跡が残っていた。：振舞いは穏和で立派な教師であり：学問に対する情熱は頗る激しかった。

⑤ 彼は思想の点で、聡明にして先見の明があっただけでなく、実行の点においても、確かに熱烈な英雄の一人であった。

⑥ 彼は祖国のために、現在（明治）の日本が大いに享受している実益そのものを手にいれようとして、生命と力と余暇のすべてを捧げた。

⑦ これは英雄的な一個人の話であると共に、ある英雄的な一人国民（日本人）だということを見逃さないでほしい。

### 独逸神学者「デュモリン」の来日初著作

さらに、かなり本格的な伝記を著したのは、一九〇五（明治三十八）年ドイツに生まれたイエズス会神学者ハインリッヒ・デュモリンである。その『Yoshida Shoin. Ein Beitrag zum Verständnis der Geistigen Quellen der Meiji-erneuerung』は、一九三五（昭和十）年に来日して翌年から東京帝国大学で日本宗教史を研究中に初めて書かれ、英文の「日本文化誌」(Monumenta Nipponica) 創刊号に掲載された。

これは、東中野修道氏（亜細亜大学教授）の手で翻訳され、詳細な解説も加えた『吉田松陰―明治維新の精神的起源―』（昭和六十三年、南窓社）が出版されている。その日本語版に寄せた著者（当時、上智大学名誉教授）の序文に「松陰を通して日本人の心を深く理解したことが、その後の（東洋思想）研究に大いに役立った」とある。

デュモリンは原本の「序」で、明治二十二年（一八八九）にフランスから萩に赴任した宣教師エメ・ヴィリオンの自叙伝によって松陰を知り、「松陰は幕末の最も秀でた人物で：何といても教育者として優れてゐた」「師弟が緊密に結ばれてゐた」から、「まだ三十歳にも満たずして：この世を去つた」が「みずばらしい松下村塾から、明治の改革を指導した人物の約半数が輩出してゐる」とみる。その本文は、「特に松陰の書簡を資料として」「松陰の思想と精神」を中心に淡々と綴られているが、注目すべき指摘を三ヶ所抄出しておこう。

④神聖なる日本に天照大神が永久の存続と繁栄を約束したといふ（神勅の）思想は：その信念こそが天皇統治の輝かしい新

生復活と決定的な成果を保証するものであった。（39頁）

⑤日本国中を旅しながら長い間歩き回つてゐるうちに、日本の民族性と本質に対する松陰の理解も深まって行つたのである。（54頁）

※「地を離れて人なく、人を離れて事なし。故に人事を論ぜんと欲せば、先づ地理を觀よ」（金子重輔に語つた言葉）  
「朝鮮・満州に臨まんとならば、竹島は第一の足溜なり」（安政五年二月十九日、桂小五郎（木戸孝允）あて書簡）

⑥松陰はこの言葉（至誠）を固く信じ、この言葉に従つて行動した：死を覚悟せる者のみが誠の道を全ふし得る：何より価値があるものは、忠の誠の道であつた。（91〜93頁）

### 下田乗艦決行に見る松陰の真心

以上、欧米人による松陰評価の一端を紹介した。いずれも当然、日本人の著作ほど詳しくないが、松陰の本質と言動の意義を存外よく見抜いている。それは全集所収の原史料類により検証すれば、その実像が一層明白になろう。

たとえば、松陰が米艦へ乗り込む半月余り前から用意した「投夷書」④と、決行八ヶ月後に書いた「三月二十七日日記」⑤と、決行一年後（安政二年三月）に纏めた「回顧録」⑥がある。これらを併せ読むことにより、松陰の雄大な意図と周到な配慮と決死の至誠を窺い知ることができる。

まず④によれば、松陰は「終身奔走すとも、東西三十度、南北二十五度（日本列島の経緯度）の外に出づる能はざる」幕府の「国禁（鎖国令）をも顧みざる」決意のもと「海外に潜出し以て五大州を周遊せん」という自身の渡航目的を、あらかじめ

先方に理解させようとしている。

ついで⑥によれば、三月二十七日夜半（実は二十八日未明）、松陰と金子重輔（24）は小舟でミシッピ号に近付いたが、旗艦のポーハタン号へ廻され、前日の「投夷書」を見て目的の判っていた通訳のウィリアムズが応対に出て「この事：大將（ペリー）も余も、心誠に喜ぶ。但し：私（個人的）に君の請いを諾し難し。少し待つべし」と断られ、必死に食い下がって聞き容れられなかったことがわかる。

さらに⑦をみると、この計画は三月三日、米艦が再来して「和友通市の議（日米和親条約）もすでに決した」以上「疾々（早急に）米国へ渡りその情実を探知せん」ことを金子（長州江戸藩邸の足軽）と約束したこと、五日それを数名の同志に打ち明けたが、盟友の宮部鼎蔵すら初め「これ危計なり」と反対し、激論の末に同意したこと、七日に横浜で佐久間象山と会い、「夷船に近付くことを謀る」も漁父が「浪険なるを以て辞し」出来なかったこと、その後も再三行き違いを生じ、結局下田へ移動した米艦に乗り込んだが、志を遂げられなかったこと、しかし下田番所での取調中にも「皇国の皇国たる所以、人倫の人倫たる所以、夷狄の悪むべき所以を、日夜声高に称説」したところ、獄卒まで「涙を揮って吾が輩の志を悲し高むはなし」という有様であったことなどが、リアルに描かれている。

この一例からも、松陰は正に「至誠」（真心）の達人であり、それゆえに国内の多様な人々だけでなく、欧米の識者たちをも感動させたことがよく理解されよう。

（平成27年7月27日稿）

## 松陰から妹達への遺訓

所 功編著  
一〇〇〇円

吉田松陰が妹達に残した手紙、家族への遺訓を丁寧に解説し、松陰の家族愛・女性観を読み解く。自筆の手紙ほか関連する図版を多数収録。

昭和天皇の教科書国史 縮写合冊 二四〇〇円  
少年皇太子に不可欠な帝王学の特製教科書。博識の碩学が執筆・進講した貴重本全頁を影印公開。所功による詳細な解説を収録。付索引。

## 昭和天皇の学ばれた教育勅語

杉浦重剛著 将来の天皇のため「倫理」進講を担当した杉浦御用掛が「教育勅語の御趣旨」を平易に解き明かした希代の名著。一〇〇〇円

## 伊勢神宮と日本文化

式年遷宮 所 功著  
常石の英知 一八〇〇円  
皇室典範と女性宮家 宮家が必要か 一五〇〇円

## 皇室典範と女性宮家

なぜ皇族女子の所 功著  
宮家が必要か 一五〇〇円

## 吉田松陰と長州五傑

頭山満／伊藤痴遊／田中光頭

維新の土台を作りながらも、新しい時代を見ることになった松陰、久坂玄瑞、高杉晋作。維新政府の中核で活躍した伊藤博文、木戸孝允、井上馨。活き活きとした語りで幕末日本の姿が鮮烈に蘇る。 一八〇〇円＋税

## 吉田松陰の士規七則

広瀬豊 人倫の大道、道徳、武士の本領を叙し、武士道修養の方法と覚悟を説く。わずか七則にまとめられた松陰武士道の精髓。 一八〇〇円＋税

我々当時の青年は先輩より、此の七則に就いて、訓戒せられたるものなり 乃木希典

国書刊行会

〒174-0056 東京都板橋区志村1-13-15  
TEL.03-5970-7421 FAX.03-5970-7427  
http://www.kokusho.co.jp

勉誠出版

〒101-0051 神田神保町3-10-2

呈出版目録

TEL03(5215)9021 FAX03(5215)9025 (税抜価)  
HP=bensei.jp E-mail=info@bensei.jp